

私の
『言志四録』

新装改訂版

小島直記

kojima
naoki



工业学院图书馆
藏书章

小島直記

新装改訂版

『言志四録』
私の

著者プロフィール

小島直記（こじま・なおき）

大正8年5月1日福岡県生まれ。東京大学経済学部卒業後、海軍に入り、海軍主計大尉で終戦。戦後は教師、会社員を経て昭和40年より本格的に文筆活動に入り、明治以後の政・財界の人物を取り上げた独自の伝記文学の世界を築いた。著書に『人間的強さの研究』『伝記に学ぶ人間学』『伝記に見る風貌姿勢』『読書尚友のすすめ』『福沢山脈』（上・下）『人間の運命』（以上、致知出版社）『小説三井物産』『まかり通る——電力の鬼・松永安左エ門』『気概の人 石橋湛山』『出世を急がぬ男たち』『小島直記文学全集』（全15巻）など多数。伝記文学の第一人者である。

私の『言志四録』

〈新装改訂版〉

平成十八年五月一日第一刷発行

著者 小島直記

発行者 藤尾秀昭

発行所 致知出版社

〒107-0062 東京都港区南青山六の二の二十三

TEL (〇三) 三四〇九―五六三二

印刷・製本 中央精版印刷

落丁・乱丁はお取替え致します。

（検印廃止）

©Naoki Kojima 2006 Printed in Japan

ISBN4-88474-744-5 C0095

ホームページ <http://www.chichi.co.jp>

Eメール books@chichi.co.jp

まえがき

わが国の出版界には、無数とも言うべき多種類の本が氾濫しておるが、大きく分類すれば、「必見の書」とも言うべきものと、そうでないものとの二種類に分けられるだろう。『言志四録』は、その「必見の書」と言っても過言ではあるまい。

これは周知のように、幕末の学者佐藤一斎（文化一〇年―嘉永四年、一八一三―五二）の随想集とも言うべき著書で、四十二歳から五十二歳、壮年期のものが『言志録』、五十七歳から六十七歳、初老期のものが『言志後録』、六十七歳から七十八歳、老境のものが『言志晩録』、八十歳のものが『言志耄録』である。言い換えれば、四十年間にわたって筆録、刊行した語録で、日々の修養や心得、様々な事物の道理など、筆者の学問や体験から生まれた教訓が書かれている。西郷隆盛

もこれを愛読して一〇一条を抄録してこれを座右の銘とした。岩波文庫（全一冊）、講談社学術文庫（全四冊）がある。

私は学生時代からこれを愛読したが、アンダーラインや書き込みのあるその文庫本は、原文のほかにそれも読みたいという友人伊藤肇君（故人、財界評論家）の希望で彼に進呈した。彼の死後、その本が嗣子雷太君の手元にあるかどうか、わからない。

私はこの本を愛読し、たとえば一九八〇年落ち葉の頃ヨーロッパに行ったときもこの文庫本を携行した。この年は、還暦に達した次の年で、そういう一つの状況、自分の生活とのかかわり具合を述べていることが「私の『言志四録』」の「私の」と言うタイトルをつけた所以である。

二〇〇六年四月吉日

小島 直記

私の『言志四録』／目次

まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

死生観を考える旅・・・・・・・・・・・・・・・・8

一寸先は闇・・・・・・・・・・・・・・・・20

ロンドン塔・・・・・・・・・・・・・・・・28

少年老い易く・・・・・・・・・・・・・・・・37

伊藤肇君の死・・・・・・・・・・・・・・・・47

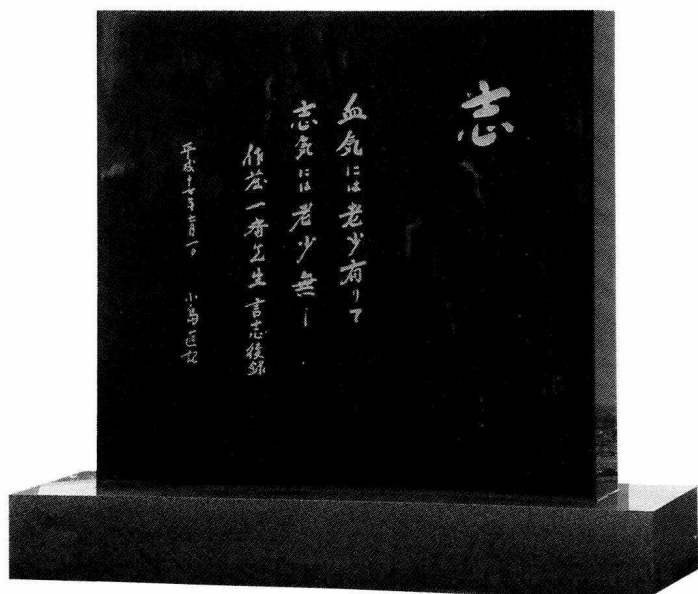
ウィンザー城・・・・・・・・・・・・・・・・56

『極道』の舞台再訪・・・・・・・・・・・・66

思い出の中の『言志四録』・・・・・・・・75

新井白石讃・・・・・・・・・・・・・・・・84

柳田国男の体温……………	95
森鷗外何人ぞや……………	105
さよならだけが人生だ……………	116
時すでにおそし……………	126
心に響くもの……………	138
『言志後録』に入る……………	149
ローマ空港は雨……………	159
余、齢已に老ゆ……………	176
只だ一燈を頼め……………	186



平成17年福岡県八女市に建てられた小島直記文学碑

私の『言志四録』

新装改訂版

小島直記

死生観を考える旅

私は、五月一日の誕生日で満八十七歳となる。

六十歳を超えてから毎年の暮れ、遺言をカセットテープに残そうと考えてきた。どうしてテープにしたかといえば、書く労をいとったからではない。私は、葬式のことを考えていた。まず、親しくしていただいた方々と家族だけの、質素で内輪なものにしてもらえばありがたい。精神的には何のつながりもなく、そのご本人も大して修業をしていないような生臭坊さんが、だみ声を張り上げて、わけもわからぬ経文を読み上げることは、よしにしてもらいたい。そのかわり、私の好きなモーツァルトの「四十番」をレコードでやってもらおう。その後、私の肉声で、葬式に来て下さった方々のご交誼に対するお礼や、その他のことを申し述べる。それがテープの目的であった。

ところで、問題は「その他のこと」である。お別れの言葉として、何をいい残すか。これは毎年その録音を果たそうとして、逗子の自宅の二階南側の桜山に面した書齋に座してみると、必ず直面し、結論の出ない難問であった。

最後の発言である、大いにしゃべりたいと思う。あるいは、簡単でもいいのではないかとも思う。その迷いのうちに、時間が流れた。いろいろな本を読んでも、遺言のところに強く引かれるのはそのためであった。『最後の海軍大将・井上成美』（宮野澄著、文藝春秋刊）でも、そのことがあった。

井上大将がまだ大佐で、海軍省軍務局第一課長時代、一切の権限を集約しようとする軍令部に徹底的に抵抗したことがある。軍令部からは、毎日のように省部互渉規程改正案を起草して捺印せよと使者が押しかけてくる。その使者は軍令部第二課長南雲忠一大佐である。しかし、井上が頑として聞かぬので、

「おいっ、井上！ 貴様みたいな物わかりの悪い奴は殺してやる！」
と詰め寄ったことがある。井上は、椅子から起き上がりともせず、

「殺されるのがこわくてこの職務が務まるか。いつも覚悟しておる。おどしにもならぬことを口にするな。海軍大臣に反旗を翻すようなことは慎め！」

とどなり返した。そして、静かに机の引き出しをあけて、一通の白封筒を取り出し、南雲の目の前に突きつけたのである。封筒には「井上成美遺書本人死亡せばクラス会幹事開封ありたし」と書いてある。

「南雲、よく聞け。おれを殺したとしても、おれの精神は曲げられないぞ」と井上はいった。

この遺書には、

一、どこにも借金はない

二、娘は高女だけは卒業させ、出来れば海軍士官へ嫁がせしめたと、たった二項が書かれてあったそうである。この簡潔な遺書に感動した。

五十歳のとき、いまは亡き評論家伊藤肇君と論争したことがある。伊藤君は、

当時四十三歳。雑誌『財界』の記者であった。

事の発端は、私の仕事Ⅱ伝記を伊藤君が「死体解剖」といい、自分の仕事Ⅱ現存実業家人物評を「生体解剖」といい、

「あんたも早く生体解剖をやらにやだめだよ」

ときめつけたことに始まる。私は二つの点で反発した。

第一、伝記を、無条件に現存実業家人物評の下位に置く価値観の問題

第二、現存実業家と面識があるということで、その人物を論評できると考えている安易、不徹底な考え方の問題

私は、

「中国の古い言葉に、『棺を蓋おおいて事定まる』（晋書劉毅りゆうぎ伝）というのがある。そ

の意味は、死んでこの世を去った後、初めてその人の生前の事業や成功の真価が定まるといふものだ。大体人物評価のポイントは、出処進退といわれる。特に退が一番重要だが、君はその退を見ないで、ゴシップ的なことばかりほじくっても

始まらぬではないか」

と反論したのである。しかし、彼は承服せず、水かけ論となってしまうた。

別れの言葉をテープに録音しようとして思い出すのは、このことであつた。死ぬという問題、つまり死に方は、すなわち生き方であり、生き方はすなわち死に方であるというのが、私の今日の考え方である。『言志四録』という本を読むことも、結局はこの生き方、つまりは死に方を考えた上での行為なのであつた。

この本の表題は、「私の『言志四録』」となっている。この「私の」という意味が本当は問題である。私はこの場合、「私の」という言葉を、私の愛読書であるということ、そして私流の読み方をしているということ、そういう意味にとつていただければ幸いだと思う。

私は、一九八〇年十一月、いまから二十六年前、落ち葉のころにヨーロッパに行つた。そのときも、この『言志四録』を持っていたのである。そこに、『言志四録』が私の愛読書であるということの一つの状況、私の生活とのかかわりぐ

あいが出ていると思う。その状況、かわりぐあいを述べることが、すなわち「私の『言志四録』」ということになる。それには、この旅そのもののことを語る必要があるようだ。一九八〇年は、私にとっては還暦に達した年の次の年である。つまり、還暦一年目の十一月九日に私は成田空港を立ち、ロンドンに向かった。そこで、旅の記録は十一月十日、ロンドンの朝に始まる。

第一日（十一月十日）ロンドン

午前五時に目が覚めた、と書けば何の変哲もないが、時差ということを考えるとどうも妙なことになる。

成田空港を立ったのが、きのうの午前十一時であった。モスクワを経てロンドン空港に到着した。モスクワ空港における一時間の滞留時間を含めて、十六時間を要している。つまり日本時間でいえば、午前三時にロンドンに着いたわけだが、それが現地時間によると午後の六時ということになる。

バスでホテルまで運ばれた。ホテルでは、日曜日のダンスパーティーでも催されるらしく、美々しく着飾った人々が次々と入ってきていた。そして、ロビーにたむろするわれわれ異邦人一行を、珍しいものでも見るようにじろじろ眺めてから会場に入っていく。部屋の割り当てを受け、トランクが運ばれるのを待ち、着がえをして食堂に集まり、晚餐^{ばんさん}という段取りになったけれども、日本時間でいえば、すべてこれ真夜中の出来事である。睡眠不足、夜中の重い食事が、肉体に悪影響を与えないはずはあるまい。

十二時にベッドに入った。が、これも日本時間では午前九時ということになる。つまり、大ざっぱにいうならば、一晚徹夜をして朝九時に床に入り、午後二時には目が覚めたということになる。これは単に時間がずれたということではない。飛行機で飛んできたということが、生理的に深い影響を残しているだろう。この生活リズムの変調に旅の日数が重なり今後の旅の疲れを増幅していく度合が問題なのである。